

## マルコによる福音書 14 章 1 節～11 節

2018 年 7 月 26 日

古本 靖久

- 1、聖歌 411 番 「ひとりの女は」
- 2、お祈り
- 3、聖書輪読 （新約聖書 90 ページ）
- 4、テキストの位置

イエス様が日曜日にエルサレムに入って、ようやく水曜日になりました。ちなみにこの聖書に聞く会でイエス様のエルサレム入城を取り上げたのは、今年の 8 月でした。

いよいよイエス様が逮捕される前の日になりました。今日の 1～2 節にはイエス様の殺

害を企てる人が登場し、10～11 節には裏切り者が与えられたことが書かれています。そしてその箇所に囲まれるようにして、イエス様が香油を注がれる物語が描かれます。

マルコによる福音書が書かれていた紀元 60～70 年頃には、イエス様の受難物語は多く広まっていたようです。しかしイエス様の十字架だけが崇められるといった傾向もあったようです。そのころの信仰告白が、パウロの手紙に出てきます。

すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。（コリントの信徒の手紙一 15 章 3b～5 節）

しかしマルコは、イエス様がどのように生きて、人々とどう関わっていったかということもとても大切だと考えました。だから福音書を書いてイエス様を伝えたのです。

エルサレムにて	水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
		14:3-9	埋葬準備
		14:10-11	ユダの思い
	木曜日	14:12-21	過越
		14:22-26	最初の聖餐式
		14:27-31	ペトロの裏切り予告
		14:32-42	ゲツセマネでの祈り
		14:43-52	イエスの逮捕
		14:53-65	イエスの裁判
		14:66-72	ペトロの否認

## 5、節ごとに

### ◆ イエス殺害計画

**14:1** さて、過越祭と除酵祭の（が）二日前（後）になった（迫った）。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエス（彼）を捕らえて殺そうと考えて（諮って）いた。

ユダヤ教には三大祝祭日があります。過越祭と仮庵祭、そして七週祭です。過越祭はイスラエル人がエジプトでの奴隷生活から解放されるときにおきた 10 の災いの最後の災いに由来します。エジプト人の長子が殺される中、イスラエルの人々には災いは「過ぎ越した」ことを記念します。（出エジプト記 12 章）

また仮庵祭はユダヤの祖先がエジプトを出て仮庵に住んだことを覚える祭りで、10 月ごろにおこなわれます。さらに七週祭は、出エジプトの 49 日後にシナイ山で律法が与えられたことを記念する日で、キリスト教の聖霊降臨日と同じ日に当たります。

過越祭はニサンの月の 14 日の夕方から始まり、日没で暗くなってから日付が変わり、15 日の夜遅くまでです。そして除酵祭は、過越の準備をする 14 日から一週間でした。イエス様の時代にはすでに、これらの二つの祝祭は合わせて考えられていたようです。

**14:2** 彼らは、「民衆が騒ぎだす（騒動を起こす）といけないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

エルサレム神殿があるころ、これらの日にはユダヤの成人男性は神殿に行き、犠牲をささげ、祝うことになっていました。つまり祭りの前後には、エルサレムには多くのユダヤ人が集まることとなります。

イエス様がエルサレムに入って来たときのことを、祭司長たちや律法学者たちはよく覚えていたことでしょう。「ホサナ、ホサナ」と叫び、イエス様を歓迎する民衆の姿は、彼らにとって恐怖でした。イエス様の逮捕によって民衆の暴動が引き起こされたなら、大変なことになるでしょう。

しかし彼らが「この期間はやめておこう」と回避したはずなのに、結果は違いました。イエス様は祭りの期間に逮捕され、十字架につけられます。つまりイエス様の十字架は、人間の意図ではなかったのです。

マルコは受難予告のときから、イエス様の十字架への道は神さまの意志であり、すでに決定されていることだと強調してきました。すべては神さまの計画なのです。

◆埋葬準備

この「香油を注ぐ」物語は、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネそれぞれの福音書におさめられています。しかし少しずつ違いがありますので、最初にそこを押さえておきましょう。

書名 (章数)	マタイ(28章)	マルコ(16章)	ルカ(24章)	ヨハネ(21章)
章と節	26章 6～13節	14章 3～9節	7章 36～50節	12章 1～8節
時期	過越祭の2日前	過越祭の2日前	ガリラヤ活動中	過越祭の6日前
場所	ベタニア	ベタニア	ガリラヤ	ベタニア
	重い皮膚病のシモンの家	重い皮膚病のシモンの家	ファリサイ派のシモンの家	ラザロの家
香油を注いだ人	一人の女	一人の女	一人の罪深い女	ベタニアのマリア
どこに注いだか	頭	頭	足	足
憤慨した人	弟子たち	そこにいた人	ファリサイ派のシモン	イスカリオテのユダ
女性は？	その行為が記念として語られる	その行為が記念として語られる	罪が赦される	記述なし

マルコとルカ、ヨハネの出来事は異なるものだと考えられています。しかし似たような物語であるため、多少混乱するかもしれません。

**14:3** (そして) イエス (彼) がベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にて (たとき)、食事の席に着いておられたとき (いると)、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って (入って) 来て、それを壊し (割り)、香油をイエス (彼) の頭に注ぎかけた。

ベタニアはエルサレム近郊の町で、オリーブ山の東方に位置しています。イエス様は昼間はエルサレムに行き群衆に語り掛けていましたが、夜になるとベタニアに寝泊まりしていたようです。ベタニアにはラザロとマリア、マルタの姉妹も住んでいました。この家の主人である「重い皮膚病のシモン」については何の言及もありません。特別な役割がないからなのか、それとも当時の人には説明が不要なくらい、有名な人だったからなのでしょう。

イエス様一行は食事のために横たわっていました。その席には基本的に男性しかいられなかったようです。そこに女中でもない女性がやってきて、イエス様の頭に油をかけるというのは、異常な行動でした。しかし人々が驚いたのは、その行動に対してではありません。

ナルドはインドの植物で、そこから抽出した油は高価なものでした。ユダヤでは豊かな女性しか、そのような香油を持つことはできませんでした。それほど高価なものを使ったことに対し、人々は憤慨したのです。

14:4 (すると) ~~そこにいた人の~~何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに(このように)香油を無駄遣いしたのか。

憤慨した人たちは、誰だったのでしょうか。マタイは「弟子」、ルカは「ファリサイ派のシモン」、ヨハネは「イスカリオテのユダ」が憤慨したと書きます。しかしマルコ福音書では単に「何人か」としか書かれていません。

この何人かの中に、わたしたちは入っていないのか、考えさせられます。わたしたちは自分の価値判断を絶対だと思い、他人を批判することはないでしょうか。「自分だったらこうしたのに」、「こんなことをするのは無駄だ」。その思いが前面に出てしまう場面はないでしょうか。

話は変わりますが4世紀ごろの写本に、この女性を「マグダラのマリア」に書き換えるものがでてきました。そのために、「マグダラのマリア」とルカ福音書の「罪深い女」が同一視され、「マグダラのマリアは娼婦だった」という考えが出て来たようです。

そしてイエス様に香油を注いだのも、「罪滅ぼし」をするためだとされ、マグダラのマリアがイエス様の近くにいられるのも、回心したから置いてもらえるのだというのです。しかし聖書にはそのような記述はなく、当時高まっていたマグダラのマリアの権威をおとしめようとした人たちが付け加えたのかもしれない。

14:5 この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた(叱った)。

香油は確かに高価なものです。300デナリオンというと、今でいうと約300万円です。且雇い労働者が一年かかって、やっと稼ぐことのできるお金です。それだけのものが一瞬にして流れていくわけです。

この言葉を見る限り、「何人か」の人は正論を述べています。このときに彼女はどのような表情をしていたのでしょうか。

14:6 (しかし) イエスは言われた。「(この人を) するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。

イエス様は彼らの怒りに同調しません。それどころか、彼女は「良いこと」をしたと言っています。それでは一体、何が良いことなのでしょう。

14:7 (なぜならば) 貧しい人々はいつ (で) もあなたがたと一緒にいるから、(あなたがたが) したいときに (いつでも) 良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも (あなたがたと) 一緒にいるわけではない。

旧約聖書の申命記 15 章 11 節に、このように書かれています。

この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。

残念ながら、貧しい人たちはいつの時代も、どこにでもいます。たとえこの女性が香油を売ってささげたとしても、すべての人を救うことはできません。施しが不要だということではありません。彼女一人が頑張ったからといって、どうにかなるレベルではないのです。

一方イエス様には、十字架のときが近づいていました。間もなく、自分たちの前からいなくなってしまうのです。その人のために、彼女は今できることをしたのです。それがイエス様のいう「良いこと」ではないでしょうか。

14:8 この人は (自分に) できるかぎりのことをした。つまり、前もって (埋葬するために) わたしの体に香油を注ぎ、~~埋葬の準備をして~~ (塗って) くれた。

彼女が今、自分にできること。それはイエス様に香油を注ぐことでした。王様などの重要な人の埋葬のときには、高価な香油で油注ぎをする習慣があったそうです。女性がイエス様の埋葬を意識して、香油を注いだかどうかはわかりません。しかし彼女の精一杯の行為が、イエス様の死を予告する出来事となったのです。

結果的に彼女は、彼女も含めたすべての人のために自分の命をささげようとしているイエス様に、自分の持っているものをささげたのです。

14:9 はっきり言っておく (アーメン、わたしはあなたがたに言う)。世界中どこでも (で)、福音が宣べ伝えられる所では (どこでも)、この人の (がわたしに) したことも (この人の) 記念として語り伝えられるだろう。」

彼女の名前は、一切聖書に出てきません。レプトン銀貨二枚を入れた貧しいやもめ同様、その名は後世には伝えられていません。しかしその行為は、わたしたちに多くのことを教えてくれます。惜しみなくささげること。神さまにすべてを委ね、神さまに用いてもらうこと。

この物語の最初に、この記事には似たものが多く混乱するかもしれないと言いました。この女性を「罪人」だと考えてしまったら、純粹にこの物語を理解できないかもしれません。

#### ◆ユダの思い

**14:10** (そして) 十二人の一人(である) イスカリオテのユダは、(彼らに) イエスを引き渡そうとして(すために)、祭司長たちのところへ出かけて(去って) 行った。

ついにイスカリオテのユダの登場です。彼は祭司長たちのところへ、去って行きました。その言葉通り、イエス様の元を「去った」のです。イエス様のそばから離れ、エルサレムの権力者の側についてのです。

ここでは明確に、ユダの動機は書かれていません。自分が求めていたメシア像と違ったのか、お金を使い込んだのか、イエス様を窮地に落とし込めば何かが起こると思ったのか。

マルコは動機は何一つ書きませんが、イエス様が 13 章 12 節で「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう」と言っているように、とても近い関係にある人によって裏切られるのです。

**14:11** 彼らはそれを聞いて喜び、(彼に) 金を与える約束をした。そこで(そして) ユダは、どうすれば折よく(うまい具合に) イエス(彼) を引き渡せるかとねらっていた。

敵対者は、ユダに裏切りの報酬を約束します。マタイ福音書には「銀貨 30 枚」と書かれていますが、マルコには金額が書かれていません。ユダはお金のために、裏切ったのではなかったのでしょうか。

#### <今日の箇所から>

「ユダ～裏切りは愛ゆえに」という 2004 年の米国映画を見たことがあります。ユダはイエス様を愛するがあまり、イエス様の行動に耐え切れなくなって敵対者に引き渡してしまう。でも本当にイエス様が殺されることは望んでいなかった。そのような内容だったように思います。

ユダは確かに裏切りました。敵対者に引き渡したのは彼です。しかし聖書は、たくさんの人がイエス様を裏切り、蔑み、痛めつけ、そして十字架に縛り付けたことを報告します。わたしたちはどうでしょうか。香油を注ぐ女性のように、今できることを神さまのみ心のためにおこなっているのでしょうか。

今回の学びはこれで終わります。次回は 8 月 23 日(木)10 時半からです。「過越、最初の聖餐式」(マルコ 14 : 12～26) について学んでいきます。